

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：30105
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：15K21312
研究課題名(和文)ピアノ伴奏法メソッド開発における基礎的研究

研究課題名(英文)Basic study of piano accompaniment method

研究代表者

新海 節 (shinkai, makoto)

藤女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：50469475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ピアノ伴奏者及び教員・保育者養成に役立つピアノ伴奏法のメソッドを検討するための基礎研究である。今回はダイナミクスに焦点を当て、国内で活躍するピアノ伴奏者の演奏分析を行い、以下の傾向を見出すことができた。(1)ピアノ伴奏者の演奏を分析した結果、歌のフレーズの頂点とその1拍前が強くなる。(2)歌がクレッシェンドをする際に伴奏はクレッシェンドの始めの部分で音量を落としてからクレッシェンドを始めている。(3)プロとアマチュアの伴奏を比較した場合、プロはダイナミクスレンジが広い。(4)プロの演奏では、基本的に歌詞の言葉の抑揚に則した音量調整が行われている。

研究成果の概要(英文)：This is a basic study which explores a piano accompaniment method useful for training skills of accompanists, teachers, and nursery school teachers in the making. The study focused on dynamics, and researched the piano accompaniment by accompanists living in Japan. The results are as follows: (1) when accompanist's piano is analyzed, the peak of song's phrases and the beat just before the peak are stressed; (2) when the volume of a song gradually increases (i.e., crescendo), the piano accompaniments begin the crescendo after the starting point of the crescendo leads to drop in volume; (3) when we compare the accompaniments by professional performers with the ones by amateurs, the dynamic range of the former is wider; (4) the professional performer's playing basically fits the volume of the music to the tone of the words of the song.

研究分野：ピアノ伴奏法

キーワード：ピアノ伴奏 ピアノ 伴奏 歌曲伴奏 伴奏法

1. 研究開始当初の背景

クラシック音楽の分野では、歌手やヴァイオリニストなどの器楽奏者が演奏する場合、特定の伴奏ピアニストに伴奏を依頼することが多い。これは伴奏者が単に楽曲において和声付けなどを担当する役目だけではなく、ソリストと共に音楽を創造する共演者としての役目があるからであり、有能な伴奏部の演奏表現を行うことができる伴奏ピアニストは一目を置かれているのである。

国内のクラシック音楽の分野では、この数十年の間に伴奏ピアニストという名称が定着してきており、実際にこの分野で活躍しているピアニストも多い。しかしながら、学術的な視点からの研究は僅少傾向であると言われていた。伴奏に関する学術的研究では、主に教員養成や保育者養成という視点から論じているものが多く、それらにおいては、伴奏部の簡易アレンジやコード奏法といったような「いかに、ピアノ初心者でも容易に伴奏を弾くことができるか」という点に関して重点的に研究が行われており、「どのように演奏したら歌いやすいのか」といった伴奏部の演奏表現に関しては、ほとんど注目されていなかった。

そのため、ピアノ伴奏法の体系的メソッドの必要性を感じ、本研究では、ピアノ伴奏に関する基礎的な研究として伴奏ピアニストの演奏を分析し、その演奏表現法を伴奏ピアニスト及び教員・保育者養成教育へ応用する方法を検討することが有益ではないかという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究では、上記の状況を踏まえ、国内で活躍する伴奏ピアニストの演奏を記録、分析し、伴奏ピアニスト特有の演奏表現はどのようなものであるかを検証することを目的とした。

歌手があるフレーズを歌う際には、その音列や歌詞を意図した抑揚を持って歌うと考えられるが、その抑揚はエネルギーの流れ（他の用語で説明するとすれば、ダルクローズの「アナクルーシス、クルーシス、メタクルーシス」など）と捉えることができ、主にアゴーギグとダイナミクスにより展開されていく（譜例1参照）。

The image shows a musical score for a piece marked 'Moderato'. The top staff is a treble clef with a melodic line. A blue curve is drawn over the notes, starting high, dipping, and then rising again, representing the energy flow. The bottom staff is a bass clef with a piano accompaniment consisting of eighth-note triplets. The key signature has one flat (B-flat), and the time signature is common time (C).

〔譜例1：エネルギーの流れ 一般的に

このようなフレーズでは、エネルギーはソ（G4）に向かって増幅し、その後減衰するものと感じられる。〕

このような音楽的な抑揚を伴奏者が意識することは重要であり、より良い伴奏部の演奏表現は共演者に対し、このエネルギーの流れを意図しやすくすることができるのではないかと考えた。

今回は、上記のアゴーギグとダイナミクスのうち、より可視化のしやすいダイナミクスに着目し、伴奏ピアニストがどのような音量調整を行っているのかという点に関しての分析を行い、その傾向を基に伴奏ピアニストや教員・保育者養成に用いることのできるピアノ伴奏における表現技術を検討した。

3. 研究の方法

（1）先行研究の収集、整理

前述のとおり、学術的な観点から作成されているピアノ伴奏法に関する先行研究は僅少であると言われていたが、実際にそのような傾向があるか否かを検討するため、文献資料の収集・整理を重点的に行った。

（2）伴奏ピアニストの演奏の分析

国内で活躍する伴奏ピアニスト4名を研究協力者として、芸術歌曲や声楽練習曲、童謡などの楽曲の演奏データを記録し、伴奏部の演奏におけるダイナミクスの分析を行った。

記録の方法は、研究協力者の伴奏ピアニストにハイブリッドピアノ（ヤマハ社製ハイブリッドピアノ AvantGrand N2）にて歌唱を伴わないパターンと歌唱を伴う（歌手と共に演奏をする）パターンの2種類を演奏してもらい、MIDIデータとしてパソコン上に記録した。

記録したMIDIデータのうち、音量を示すベロシティのみを抽出し、4名のピアニストの実際の伴奏部の演奏において、どのような音量調整がなされているのかを4名の演奏のベロシティ平均値を基に考察した。

（3）プロの伴奏ピアニストとアマチュアピアニストとの演奏比較

童謡など子どもの歌を用いて、研究協力者である4名の伴奏ピアニストとアマチュアピアニスト（F大学学生）の伴奏部の演奏における音量差を、上記（2）と同様の手法（MIDIデータとして演奏を記録）により比較した。

4. 研究成果

（1）伴奏に関する先行研究などの文献資料を収集、整理した結果、1920年代から現在までに150本近くの文献資料を確認することができ、それらのうち、クラシック音楽における伴奏に関する有益な文献資料として90本程をピックアップすることができた。主に、

1960年代より音楽雑誌において海外の著名な伴奏ピアニストのインタビュー記事やピアノ伴奏に関する総論的特集が記載され、2000年以降では、ピアノ伴奏に関する学術論文が増えている傾向があった。詳細に関しては、さらなる整理を行い、2018年度中に発表予定である。

(2) 国内で活躍する伴奏ピアニストより収集した演奏データのうち、コンコーネ作曲「50番練習曲 op.9」の第5番を用い、伴奏部の演奏におけるダイナミクスの分析を行った。選曲理由は、歌詞のイントネーションからの影響を省くため、また、伴奏部が基本的にアルペジオで展開されており、ダイナミクスの変化を数値化しやすいと考えたためである。

分析した結果、以下の傾向を挙げることができる。

歌唱を伴う伴奏部の演奏と歌唱を伴わない伴奏部の演奏を比較した場合、フレーズ内における伴奏部の総体的なダイナミクスの推移に差はあまり見られない(伴奏ピアニストは歌唱を伴わない場合でも、常に歌唱部のメロディを意識しながら演奏している)。

基本的に、歌唱部のメロディの音楽的抑揚に沿った音量変化をしており、歌のフレーズの頂点(フレーズ内の音楽的抑揚の中で最も盛り上がりを感じる箇所)とその1拍前が強くなる傾向がある。

歌唱部においてフレーズの中に2分音符+4分音符というパターン(譜例2参照)では、2分音符の2拍目の音量が強くなる傾向がある。

歌がクレッシェンドする際には、伴奏部のクレッシェンド指示の箇所ですぐ音量を落としてからクレッシェンドを始める。



〔譜例2：歌唱部の2分音符+4分音符のメロディ〕

(3) 子どもの歌を用いて、プロの伴奏ピアニストとアマチュアピアニストの伴奏部の演奏を比較した場合、以下の傾向を挙げることができる。

プロの方が、ダイナミクスレンジが広く、ダイナミクスによる細密な表現が行われている。

前奏がない曲の場合、プロは出だしの音量が小さく、歌手の歌いだしの音量とのバランスを図る様子が見受けられる。

歌唱部のメロディと伴奏部右手のメロディが同一の場合、プロの演奏では、基本的に歌詞の言葉のイントネーションに則した音量調整が行われている。

上記(2)(3)については、学会発表や研究代表者の演奏実践研究(演奏会などのピアノ伴奏)において成果発表を行った。

演奏データの分析(楽曲におけるダイナミクスの抽出)は非常に時間のかかる作業であり、今回蓄積することのできた楽曲データの全てを分析し、成果発表を行うことはできなかったが、蓄積したデータに関しては継続的に分析を行い、研究成果の発表を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

新海節 石橋克史、大高紫乃、新海節 教員、保育者養成校における音楽関連科目に関する現状と課題 - 本学科におけるピアノレッスンの科目内容などの現状と課題 -、藤女子大学人間生活学部保育学科教育実践報告集、査読無し、第1号、2017、19-29

新海節 子どもたちの豊かな感性や表現する力を養い、創造性を導くために必要となる保育者としての音楽的知識や技能について - 本学保育学科開講科目「保育内容(音楽表現)」の現状と課題 -、藤女子大学人間生活学部保育学科教育実践報告集、査読無し、第1号、2017、8-12

新海節 小学校教員及び保育者養成課程におけるピアノ伴奏法、藤女子大学人間生活学部紀要、査読無し、第53号、2016、81-88

〔学会発表〕(計3件)

新海節 歌唱におけるピアノ伴奏法に関する一考察 - 伴奏ピアニストとアマチュアピアニストのダイナミクスの比較 -、日本音楽表現学会第15回大会、東京音楽大学(東京都、豊島区)、2017年6月18日

新海節 小学校教員及び保育者養成課程における音楽系科目について - 領域『表現』に根ざした音楽表現や演奏に関するスキルの効果的向上を目指して -、全国大学音楽教育学会北海道地区学会研究会、北海道教育大学旭川校(北海道、旭川市)、2016年7月2日

新海節 歌唱におけるピアノ伴奏法に関する一考察、日本音楽表現学会第14回大会、拓殖大学北海道短期大学(北海道、深川市)、2016年6月5日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新海 節 (SHINKAI, Makoto)
藤女子大学・人間生活学部・准教授
研究者番号：50469475

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

石井 里乃 (ISHII, Rino)
河原 忠之 (KAWAHARA, Tadayuki)
鳥井 俊之 (TORII, Toshiyuki)
吉田 貴至 (YOSHIDA, Takayuki)